

デジタル・マネーと国際金融 ― 新たな経路と新たなリスク ―

杉浦 達也（国際通貨基金（IMF）金融資本市場局・審議役）

デジタル通貨と決済の分野は、技術進歩と金融ニーズの変化によって大きく変容してきている。ステーブルコインを含む暗号資産の拡大、資産のトークン化の進展、そして中央銀行によるデジタル通貨（CBDC）の検討は、国際金融システム、とりわけクロスボーダー決済の構造に新たな変化をもたらしつつある。さらに、地政学リスクの高まりを背景に、国際決済インフラの戦略的重要性が改めて認識されるようになり、国際金融の分断化への懸念が指摘されている。

本報告では、こうした動向を「新たな経路」と「新たなリスク」という二つの観点から整理する。第一に、ステーブルコインは高インフレ国や資本規制下の経済を中心に、国際送金や価値保存手段として利用が拡大していることが指摘されており、既存のコルレス銀行網を経由しない決済経路となり得る。また、ステーブルコインを含む暗号資産は、金融制裁や AML/CFT の枠組みとの関係においても新たな政策課題を提起している。さらに、複数国間での CBDC 接続や新たな決済アーキテクチャの構築に向けた取組みも進展している。

他方で、これらの新たな経路は、金融制裁の効果、資本移動管理の実効性、国際決済ネットワークの分断といった観点から、潜在的なリスクを内包する可能性がある。とりわけ、米ドル建てステーブルコインの拡大は、米ドルの国際的役割を補完する側面とともに、各国の通貨主権や規制枠組みに新たな課題を提起する側面も有している。

本報告では、このようなデジタル・マネーの進展が国際金融にもたらす構造的変化を概説し、安定性と接続性を確保する観点からの政策的課題について考察する。